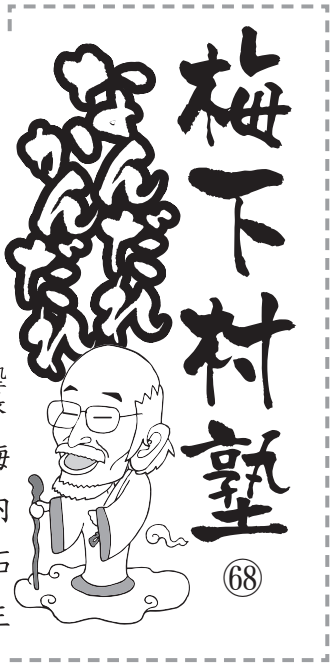
梅下村塾 ㊽



塾長　梅内拓生

「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～

東日本大震災から学ぶもの(4)

（復興の心と芸術）

2012年の5月にリアスホールで開催された「森と水と命の惑星」国際会議で、パネリストの大船渡市出身で米国在住の鵜浦真紗子氏が「いのちの彩（いろ）プロジェクト」で現代芸術家のロッカクアヤコさんと地元保育園児ら約200人がペイントした作品を提示した。被災地の子供たちの心を後々の世代に伝えるための作品である。

絵画は、それを作製した人と、それを見る人との関係によって、そこから受け取るものがいろいろ異なっている。私が見たものは、作製中の絵の前に子供たちの絵の具などが置いてあるものの写真であった。

絵と子供たちの道具が無造作においてある空間から、海と海の向こうの花園の楽園のイメージが湧いて来るものであった。何か大きなものが胸に響いて来る作品であった。

作家の司馬遼太郎氏は新聞社で美術評論を書く仕事をしていたころは、セザンヌの造形理論が流行しており、絵を素直な心で見るのはなく、造形理論に無理に合わせて評論をしていた頃の苦しさを述べており、絵は自分の裸眼で見るものであるということを書いている。

大震災から早や2年が過ぎようとしている。復興への取り組みが進むと同時に、大震災への感情もいろいろ変化してくる。保育園児らの作品の見方も、意味もいろいろ変化をしてくるが、この絵は、震災直後の被災地に渦巻いている草の根の気韻を後の世代に伝えるものになるだろうと期待している。

（東北の心と芸術）

気仙の母体である東北出身の数十年前まで活躍していた芸術家に目をむけると、棟方志功が挙げられる。版画家である棟方志功は、木彫りの版画を駆使して、命の母の豊かな世界を描き出している。

雪国の弘前に生まれ育った棟方芸術には、ネブタ祭りの草の根の命のリズムが伝わって来る。秋田市の平野美術館には藤田嗣治の「秋田の行事」の横長い大きな絵が展示してある。馬方、馬そり、市に集まって来る人々の姿、雪国の生活の熱気と呼吸のリズムが生き生きと伝わって来る。

藤田嗣治が、パリに生活の場を移してから描いた、「女と猫」の絵には、物質文明を生みだしたヨーロッパ文化の中で孤独に耐えているものが伝わって来る。「秋田の行事」と「女と猫」、この二つの絵を見ると、東北の草の根に息づいている「生きる力」が伝わって来る。

福島生まれの詩人である草野心平の作品には、蛙から見た人間の世界と自然との関係が詠まれている。それは、草の根の文化が受け継いで来た世界である。それは宮沢賢治の世界にも通じていると思う。気仙の伝統芸術と現代芸術の掘り起こしが待たれる。

（不易と流行）

現代世界はめまぐるしく変化している。電子通信の発達は日常生活のいろいろな変化を引き起こしている。書籍から電子媒体への変化はその一つである。

2月11日（月）の第1面の「世迷言」には世界の大新聞社も紙面から電子媒体への変換を余儀なくされていると述べている。しかし、新聞の紙面も書籍も、残るものは残りうるだろうと思う。人間の文化は文字を発明してから、急速に発展してきた。

紙の媒体は、情報発信のスピードと情報を咀嚼する時間との関係によって、その情報の味わいが違う。このバランスの「妙」で生き残るか、消えていくかが決まって来る。江戸時代の俳人である松尾芭蕉は俳句の世界にこのバランスの「妙」があることを「不易と流行」という言葉で述べていた。

いのちの彩（いろ）プロジェクトの子供たちの絵、これは東日本大震災への記憶の風化、あるいは「不易と流行」の関係の変化のバロメーターになるのか、今後、注意深く見つめていかねばならない。